

# 七夕伝説の比較文化 - 中国、日本、韓国朝鮮、ベトナムの比較 -

杉 本 妙 子

## 1 はじめに

中国の古典に源を發する七夕伝説は、中国文化の影響を強く受けた朝鮮半島、日本そして越南などに伝播し、現代にまで伝えられてきている。その七夕伝説の骨格は、愛し合う牽牛と織女（伝説によって名前は異なる）が、天王の怒りに触れ離ればなれになるが、年に一度、七月七日の夜にだけ会うことを許された、という物語である。しかし、日本でも『古事記』や『万葉集』にすでにその物語などが詠み込まれた歌を見ることができるよう、中国周辺の各地に伝わった時期は古い。そして、その七夕伝説は現代にまで伝えられてきたという長い時間の経過の中で、それぞれの地域でその地域の気候風土や風習などの影響を受けて、それぞれに変容している。

本稿では、中国の古典の七夕伝説を確認した上で、日本、韓国（朝鮮半島）、ベトナムのそれぞれに現代までも伝わっている七夕伝説や伝承などのいくつかを取り上げ、中国の七夕伝説を中心に比較しながら、それぞれの地域の伝説の特徴や、各地でどのような部分がどのように変容したかについて述べていく。また、これまであまり日本で紹介されていないベトナムの七夕伝説も本稿の目的の一つとして紹介する。

なお、七夕については種々の行事や習慣もあり、その面からの比較検討もすべきであろうが、本稿においては七夕伝説に限って比較することとする。また、以下では各種資料からの引用を行うが、原文が旧漢字の資料の引用の際には、旧漢字を新字体に代えて引用した（人名等の固有名を除く）。また、漢詩の返点は省略した。

## 2 中国の七夕伝説

中国において、「織女」「牽牛」の名が登場するのは『詩經』の小雅が初出と言われている。また、七夕伝説は『文選』の古詩十九編がもっとも古いものの一つとされている<sup>(注1)</sup>。

『詩經』小雅の「大東」（全七章のうち、第五～六章）  
或以其酒 不以其漿 ある そ さけ もち 或いは其の酒を以ふるも 其の漿を以ひず そ しやう もち  
韞韞佩璲 不以其長 けんけん はいすい そ なが 韞韞たる佩璲 其の長きを以ひられず もち  
維天有漢 監亦有光 こ てん かん あ 維れ天に漢有り 監れば亦光有り み またひかり あ



い。

牽牛と織女の年に一度の逢瀬については、紀元6世紀頃の『荊楚歳時記』<sup>(注2)</sup> などに見ることができるようである。今、東洋文庫本『荊楚歳時記』の七月の記述の一部を引用する。

七月七日、牽牛・織女、聚会の夜と為す。

戴徳の「夏小正」を按ずるに云う。是の日、織女東に向うと。蓋し星を言うなり。『春秋斗運枢』に云う。牽牛神は略と名づく。『石氏星経』に云う。牽牛は天関と名づく。『佐助期』に云う。織女神は収陰と名づく。『史記』天官書に云う。是れ天帝の外孫なりと。傳玄の『擬天問』に云う。七月七日、牽牛織女、天河に会すと。此れ則ち其の事なり。旧説に天河と海と通ず。近世、人の海渚に居る者あり。毎年八月、浮槎あり、去来、期を失わず。人、奇志を有ち、飛閣を槎上に立て、多く糧を齎し、槎に乗りて去る。十余月にして一処に至る。城郭の状あり、屋舎甚だ蔽なり。遙かに宮中を望めば織婦あり、一丈夫が牛を渚次に牽いて之に飲ましむるを見る。牛を牽く人、乃ち驚き問いて曰く、何に由ってか此に至ると。此の人、為に来意を説き、并せて此は是れ何処ぞと問う。答えて云う。君、還りて蜀都に至り、蔽君平を訪ぬれば則ち之を知ると。竟に岸に上らず。因って還ること期の如し。後、蜀に至り、君平に問う。君平曰く、某年某月、客星ありて牽牛の宿を犯せりと。年月を計るに、正に此の人が天河に到りし時なり。牽牛星、荊州、呼んで河鼓となし、関梁を主る。織女は則ち瓜果を主る。嘗つて道書を見るに云う。牽牛、織女を娶りしとき、天帝に二万錢を借りて礼を下す(備う?)。久しく還さず、驅られて宮室の中に在りと。河鼓・黄姑も牽牛なり。皆な語の転なり。

『荊楚歳時記』では、「七月七日、牽牛・織女、聚会の夜と為す。」とあり、また各種の文献から、織女は天帝の外孫であること、牽牛と織女は天河(天の川)で会うこと、牽牛と織女とは夫婦となったこと、などの説明が加えられているのである。

また、牽牛・織女を詠んだ漢詩等も多い。『玉台新詠』には次のような漢詩が収められている。

詠牛女(牛女を詠ず)  
 秋動清風扇 火移炎気歌  
 広欄含夜陰 高軒通夕月  
 安歩巡芳林 傾望極雲闕  
 組幕縈漢陳 竜駕凌霄笳  
 誰云長河遙 頗劇促筵越  
 沈情未申写 飛光已飄忽  
 来对眇難期 今歡自茲没

謝 惠連

秋動きて清風扇ぐ、火移りて炎気歌む。  
 広欄夜陰を含み、高軒夕月通ず。  
 安歩して芳林を巡り、傾望して雲闕を極む。  
 組幕漢を縈りて陳べ、竜駕霄を凌ぎて笳す。  
 誰か云ふ長河遙かなりと、頗る促筵の越よりも劇し。  
 沈情未だ申写せざるに、飛光已に飄忽たり。  
 来対は眇として期し難し、今歡は茲より没す。

**通釈** 秋が訪れて清らかな風がそよぎ、火星は移って暑さの気がおさまった。広やかな欄干は夜のうす暗さを含み、高い軒端には夕月の光がさしこんでいる。

織女星<sup>ひめぼし</sup>はゆるやかに歩を移し、林をめぐり、目をさしむけて、天門<sup>くみひも</sup>はるか眺めやる。組紐<sup>くみひも</sup>に連ねた幔幕<sup>まんまく</sup>が天の河原をめぐってのべひろげられ、そこへ向かって織女の馬車が大空を凌いで出発する。

天の河は長く且つ遠いなどとは申すまい。それは宴会の際座席を越えて進むより、もっと速いと言うてもよい。両星は相会して、深い思いの中をまだ述べきらぬうちに、時の光は忽ち飛び去り、将来の面接は予期し難いことになってしまった。そして今の嬉しい逢うせはこれきりとなるのであろうか。

詠織女<sup>しよくぢよ えい</sup>（織女を詠ず） 劉 孝儀

金鈿已照耀 白日未蹉跎<sup>きんでんすで せうえう</sup> 金鈿已に照耀するも、白日未だ蹉跎<sup>はくじついま さた</sup>たらず。  
 欲待黄昏後 含嬌渡浅河<sup>くわうこん のち ま けう ふく せん か わた</sup> 黄昏の後を待ちて、嬌を含みて浅河を渡らんと欲す。

**通釈** 金のかんざしはもはや照りかがやいています。太陽はまた傾きかけず、日暮れには遠い。たそがれ時を待って笑顔をつくって、河の浅瀬を渡りましょう。

『玉台新詠』にはこれらの他にも、王鑿「七夕観織女一首」では織女が千乗の車で星河（天の川）を渡る姿が歌われていたり、何遜「詠七夕」では織女が仙車で天漢（天の川）を渡ることが歌われているなど、数多くの七夕伝説の漢詩を見ることができる。

また、清時代の北京の様子を述べた東洋文庫本『燕京歳時記』七月の条には、次のような記述もある。

鵲填橋（鵲の橋架け）

七月七日のすがすがしい早朝は烏鴉<sup>からす</sup>や喜鵲<sup>かさざき</sup>の飛鳴するものがやや遅い。俗説にこれは橋を架けに行くからだといっている。（後略）

これらによって、中国では古くから牽牛・織女は織女が車（仙車）で川をわたる、あるいは鵲の渡した橋で二人が会う、と考えられていたことがわかる。

では、現代にはどのような七夕伝説が伝わっているのだろうか。現代では、旧暦の七月七日の夜、地上界の牛郎と天帝の娘の織女が天の川で会うという神話として語られているようである。そのおおよその伝説は、次のとおりである。

昔、あるところに牛郎という牧童がいた。(兄夫婦が意地悪なので) 牛郎は牛と暮らしていた。その牛がある日(死ぬ前に)、「ある湖に七人の天女(玉皇大帝の娘)が水浴びに来るので、赤い服(桃色の服)を隠しておきなさい」といった。牛はまた死ぬ前に、困ったことがあったら役に立つので自分が死んだら皮をはいでおくようにとも言った。

牛郎は牛に言われたとおりに、天女たちが水浴びに来た時に、赤い服を隠しておいた。そして、牛郎とその娘、織女は結婚し、男の子と女の子の2人の子をもうけた。

一方、天界では、織女が地上にいることが、父の玉皇大帝の知るところとなった。玉皇大帝は王母娘娘に命じて織女を天上に連れもどした。牛郎は(天秤棒の両端に2人の子を籠に入れて吊さげ) 牛の教えてくれたとおりに牛の皮を被って織女を追いかけた。しかし、追いかけてくる牛郎を見た玉母娘娘は、牛郎の目の前に天の川をつくり、2人が会えないようにしてしまった。

牛郎に会えなくなった織女はひどく悲しがり、やがて王母娘娘も織女をかわいそうに思い、七月七日に天の川に渡した鵲橋の真ん中で会えるようにしてくれた。それで、この日には地上から鵲がいなくなってしまうと言う。また、この日は必ず雨が降るが、これは二人の流す涙だと言う。

最後が少し違う伝説もある。その最後の部分は次のようなものである。

織女をかわいそうに思った王母娘娘は、七日ごとに二人が会うことを許し、鵲に命じて知らせに行かせた。しかし、鵲は口べたで、「チチチ…」としか言えなかったので、七月七日に会えることだと伝わってしまった。それで、年に一回、七月七日だけ二人が会うことになった。鵲は間違っただけで知らせたので、その罰として、毎年七月七日になると天の川に橋を架けることになった。そのため、この日だけは人間の世界から鵲がいなくなるという。

また、七月七日の日、中国では、女性が織物や編み物をして、好きな男性にそれをプレゼントする風習がある地域があるという。それはちょうど夏のバレンタインデーのようなものだそうである。

さて、今に伝わる中国の七夕伝説のポイントをまとめると、次のようになる。

- ・牛郎(牽牛)は天上界の牛の化身の老牛と暮らしていた
- ・牛が牛郎に、織女がやって来ること、死んだ後の自分の皮が牛郎を救うことを伝える
- ・天上界の織女が地上界に水浴びに来て、牛郎と出会う
- ・地上で水浴びする天女は七人である
- ・牛郎は織女の衣を隠して、織女と夫婦になる
- ・牛郎と織女は、男の子と女の子の二人の子をもうける
- ・天上界に戻らない織女に天帝が怒り、王母娘娘に命じて天上界に連れ戻す
- ・牛郎は牛の皮をかぶって(二人の子と)織女を追いかける

- ・追ってくる牛郎の目の前に王母娘娘によって天の川が現れ、二人を離ればなれにする
- ・牛郎と離ればなれになった織女の悲しみを見かねて、年に一度会うことを許す
- ・牛郎（牽牛）と織女は鵲のつくる橋で再会する

中国の七夕伝説では、古典の詩歌に詠われた牽牛星・織女星の話に羽衣伝説が加わり、複雑な物語になっている。そして、その中において老牛また牛の皮が重要な存在となっている点が一つの特徴である。また、牽牛と織女は二人の子をもうけるという点や、嘆き悲しむ織女を見かねた王母娘娘が鵲に命じて橋をつくり、二人が年に一度会えるという点なども、中国の伝説の特徴と言っている。また、古典に見られた織女が仙車で川を渡るという再会の形も、鵲の橋を二人は互いに渡って行って再会することにほぼ集約されている。これらの諸点から、古典の中の七夕の話が、長い時間の経過の中で、変化発展して今に伝わっていることがわかる。

### 3 日本の七夕伝説

日本に七夕伝説が伝わったのは古く、奈良時代初期までには伝わったとされている（注2参照）。日本の七夕伝説の古い形として、奈良時代に成立した『万葉集』巻十「秋の雑歌」に、既に七夕伝説を詠んだ数多くの一連の歌をみることができる。また、平安時代の『古今和歌集』巻四の「秋歌上」にも、七夕伝説を詠んだ多くの歌がある。その中のいくつかの歌を見てみよう。

#### 『万葉集』巻十

- 2042 しばしばも相見ぬ君を天の川<sup>ふな</sup>出<sup>で</sup>はやせよ夜<sup>よ</sup>のふけぬ間に
- 2044 天の川霧立ちわたり彦星<sup>おと</sup>の梶<sup>か</sup>の音聞<sup>よ</sup>こゆ夜<sup>よ</sup>のふけ行けば
- 2045 君が舟今漕ぎ来らし天の川霧立ちわたるこの川の瀬に
- 2048 天の川<sup>かはと</sup>川門<sup>と</sup>に立ちて我が恋<sup>あ</sup>ひし君来ますなり紐解き待たむ 一に云ふ、「天の川 川に向き立ち」
- 2052 この夕降り来る雨 彦星のはや漕ぐ舟<sup>か</sup>の櫂<sup>かい</sup>の散りかも
- 2089 天地<sup>あめつち</sup>の 初<sup>はつ</sup>めの時<sup>とき</sup>ゆ 天の川 い向<sup>を</sup>ひ居<sup>を</sup>りて 一年<sup>ひととせ</sup>に 二度<sup>ふたたび</sup>逢<sup>あ</sup>はぬ 妻<sup>つま</sup>恋<sup>こひ</sup>に 物思<sup>もの</sup>ふ人<sup>ひと</sup>
- 天の川 やす <sup>かはら</sup> 安の川原の <sup>かよ</sup> あり通<sup>か</sup>ふ 出<sup>で</sup>々の渡<sup>わた</sup>りに <sup>ぶね</sup> そほ舟の <sup>とも</sup> 舳<sup>へ</sup>にも舳<sup>へ</sup>にも <sup>ふなよそ</sup> 船装<sup>ふね</sup>ひ <sup>かじ</sup> ま梶
- しじ<sup>ぬ</sup> 貴<sup>き</sup>き はたすすき <sup>もとは</sup> 本葉もそよに 秋風<sup>あきかぜ</sup>の 吹<sup>ふ</sup>き来<sup>き</sup>る夕<sup>ゆふ</sup>に 天の川 白波<sup>しらかぜ</sup>しのぎ 落<sup>お</sup>ちたぎつ 早瀬<sup>はやせ</sup>渡<sup>わた</sup>りて 若草<sup>わかしら</sup>の 妻<sup>つま</sup>が手<sup>て</sup>まくと 大舟<sup>おほふね</sup>の 思<sup>おも</sup>ひ頼<sup>たの</sup>みて 漕<sup>こ</sup>ぎ来<sup>き</sup>らむ その
- 夫<sup>つま</sup>の子<sup>こ</sup>が <sup>こ</sup> あらたまの 年<sup>とし</sup>の緒<sup>いと</sup>長く 思<sup>おも</sup>ひ来<sup>き</sup>し 恋<sup>こひ</sup>尽<sup>つ</sup>くすらむ 七月<sup>ふみづき</sup>の 七日<sup>なぬか</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>は 我<sup>われ</sup>も悲<sup>かな</sup>しも

#### 反歌

- 2090 高麗<sup>こまにしき</sup>錦<sup>にしき</sup>紐<sup>ひ</sup>解<sup>か</sup>き交<sup>あ</sup>はし天人<sup>あめひと</sup>の妻<sup>つま</sup>問<sup>と</sup>ふ夕<sup>ゆふ</sup>ぞ我<sup>われ</sup>も俤<sup>しの</sup>はむ
- 2091 彦星<sup>おと</sup>の川<sup>かは</sup>瀬<sup>せ</sup>を渡<sup>わた</sup>るさ小舟<sup>こふね</sup>のえ行<sup>い</sup>きて泊<sup>は</sup>てむ川津<sup>かわつ</sup>し思<sup>おも</sup>ほゆ

## 『古今和歌集』

174 ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなばかち楫かくしてよ よみ人しらず  
 182 今はとてわかるゝ時はあまの河わたらぬさきに袖ぞひ漬ちぬる 源宗むねゆきの于朝臣

遣唐使によってもたらされた漢籍によって、日本に七夕伝説や乞巧奠が伝わったと言われている。そのことは『万葉集』に収められている数多くの七夕の歌によってわかる。また、この時代には既に中国から伝わった七夕伝説が、少なくとも知識層には浸透していたこともわかる。そして古代の人々は、彦星（牽牛）と織女が年に一度七月七日の夜に会うこと、彦星が舟で天の川を渡って織女に会いに行き、織女は彦星がやってくるのを待ちこがれている、などと考えていたようである。このロマンチックな物語は、古代の日本人に好まれたようで、『万葉集』には、巻十「秋の雑歌」の1996番歌から2093番歌までの一連の歌を始めとして、七夕を詠んだ134首もの歌が収められている（注3）。

さて、前節で述べたように、中国の古典では、牽牛と織女は鵲の橋を渡って会う、あるいは織女が牽牛のもとにやってくる、となっている。二人の年に一度の逢瀬という重要な場面において、七夕伝説は日本に伝えられた古代において既に日本化されて受け入れられたことがわかる。

しかし、日本でも、中国の伝説のように、鵲の橋を渡る、あるいは織女が天の川を渡る、としたものもある。それらは漢籍を中心にみることができる。

## 『万葉集』 卷十

2081 天の川たなはし棚橋たなばた渡せ織女のい渡らさむに棚橋渡せ

## 『懷風藻』

鳳蓋ほうがい隨風したが轉 鵲影うご逐波じやくえい浮 鳳蓋風に隨ひて転ぎ、鵲影波を逐ひて浮かぶ。（織女星の乗った車は風の吹くままに移って行き、（橋をかけようとして）かささぎの影は天の河の波のまにまに浮かぶ。）（藤原朝臣史「七夕」五・六句）

靈姿れいし理雲うんびん鬘をさ 仙駕せんが度くわうりう潢流わた 靈姿雲鬘を理め、仙駕潢流を度る。（織女星の御車（仙車）は天の川を渡って彦星の許へ行く。）（山田史三方「七夕」三・四句）

仙車せんしや渡か鵲橋ささぎ 神駕しんが越きよ清流ながれ 仙車鵲の橋を渡り、神駕清き流を越ゆ。（織女星の車は鵲のかけた橋を渡り、その車は清らかな天の河の流れを越えて牽牛星のもとに行く。）（出雲介吉智首「七夕」五・六句）

## 『和歌朗詠集』

202 天の川あまあふかはぎのかぜにくもはれてそらすみわたるかさはしゝたなばたあふぎあはせぎの橋 七夕扇合 元輔もとすけ

216 去衣きよ曳浪い霞なみ応ひ湿かすかたる 行燭かうしよく漫流なが月ひた欲消つき 去衣浪に曳いて霞湿ふべし 行燭流れに浸して月消

えなむとす くわんざんぼん  
菅三品

古くは『万葉集』において、また、平安時代以降の漢籍を中心に、七夕伝説の原型に近い形で和歌・漢詩に詠まれているのである。また、百人一首にも採られている新古今和歌集所収の家持の歌の第一句「かささぎの渡せる橋」に見られる橋の枕詞<sup>(注4)</sup>のごとく、二人の出会いを助ける鵲がつくる橋は、和歌の世界にも定着してもいる。しかしながら、和歌においては、やはり日本化された七夕伝説が圧倒的に多く詠まれており、日本における七夕伝説の定着に日本化は欠かすことのできないプロセスであったと捉えるべきだろう。この中国七夕伝説の日本化については、桜井満氏が『節句の古典』の中で、次のように述べている。

「天地の初めの時ゆ」(2089番歌の第一句。杉本注)と神話ふうの発想をとり、天の川をはさんで恋い焦がれる彦星が、秋風が吹く七月七日の夜に船を飾って対岸の織女のもとに通い、年に一度の思いを晴らすのだという。今日に伝えられる七夕伝説と同じである。それはすでに千二、三百年前に日本化されたものだったのだ。

中国にあっては、天の川を渡るのは、織女であり、唐詩などでは「鵲の橋」を渡るという。『懐風藻』の七夕詩には「仙車鵲の橋を渡り、神駕清き流れを越ゆ」などとみえるが、『万葉集』では船を漕ぎ、あるいは瀬を渡るのであり、それは牽牛であることが圧倒的に多い。日本では妻問婚の時代であるから、牽牛が通って行く読みかえたのである。それはまた海を渡って唐にいる遣唐使たちの思いでもあったことだろう。この漢詩と歌の相違は、中国の文化を受容するのに、もともと中国の詩である漢詩にはそのままのかたちで表現されるのに対して、日本の歌が受容するには日本化が必要だったのであろう。(p.135)

また、桜井氏は彦星が漕ぎ渡っていく船は、「月の船」であるとも述べている。

七夕には、天の川をはさんで強い光りを放つ琴座の織女星と鷲座の牽牛星とが接近するのだと信じられている。星同士が近づくということは実際にはないことだが、陰暦の七月七日の夜すなわち「七夕」には、天頂に織女星が輝き、天の川を隔てて牽牛星が輝く。そして半月になった月の船がいかにも漕ぎだすかのように見えるのである。

『万葉集』には「月の船」という表現が三首の歌にみられ、それがどれも七夕の歌とみてもよいものようだ。巻七の巻頭に飾られた柿本人麻呂歌集所出の「天を詠む」歌に、

天の海に雲の波立ち 月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ (一〇六八)

とある。ひろびろとした大空の海に雲の波が立って、月の船がたくさん星の中に漕ぎ隠れて行くのが見えることだ、というのである。天を海に、雲を波に、月を船に、星を林に、それぞれ見立てている。これは漢詩文の影響を受けた新しい表現であるが、「漕ぎ隠る」の主語は、

「月の船」であり、この「月の船」の表現に他は導かれたとみてよからう。七夕の月は上弦の半月すなわち船の形になる。そこに雲が流れると波に見立てられる。そうすると天は海に見立てられるわけだ。「天を詠む」歌になるが、「月の船」が中心である。それは、七日の月であれば七月に限らないが、やはり七夕の宴で詠まれたとみるのが自然だと思われる。(p.126)

さて、現代まで伝わる日本の七夕伝説としては、日本各地に伝承されている種々の昔話がある。それらでは、天上界と地上を結びつける存在の違いなどで異なる部分があるが、今、最もポピュラーなものの一つとして『まんが日本昔ばなし』の七夕の話を取り上げてみたい。その話のおおよそは次のようなものである。

昔、ある村にいた若者が、畑仕事の帰りに美しい衣を見つけて持って帰ろうとした。実はその衣は、天女の羽衣で、下界に水浴びに来ていた天女のものであった。天女(たなばた)は若者に羽衣を返してくれるよう頼むが、若者は知らんぷりをし、天へ帰れなくなったたなばたはとうとう若者の家に行くことになった。若者とたなばたは夫婦になり、仲良く暮らすようになった。ある日、若者が畑仕事に出ている時、たなばたは天井の梁の隙間を鳩がつついて羽衣を引っ張り出しているのを見た。そして、羽衣を見つけたたなばたは、それをまとい、若者に「もし私を恋しいと思うなら、わらじを千足編んで、竹の周りに埋めて下さい。きっとまた会うことができます。」と言って天上界に帰っていった。そこで、若者は夜も昼もわらじを編み続け、ある日、千足のわらじを編み終え、竹の周りに埋めることができた。わらじを埋めたところ、竹はぐんぐん空高く伸び、若者はその竹を登り始めた。ところが、もう少しというところまで来たところで、どうしても天に手が届かない。というのは、わらじは九百九十九足しかなかったからだ。そこで、若者がたなばたを呼ぶと、その声がたなばたに届き、たなばたは若者の手を引いて天上界に引き上げた。二人が再会を喜んでいて、たなばたの父がそれを見て、若者に種まきを言いつけた。言いつけどおりに種まきをすると、たなばたの父は畑が違うからまき直せ、という。そこで、たなばたの助けを借りて若者が種をまき直すと、次は三日間瓜畑の番をしると命じた。若者は、畑の瓜を食べてはいけない、とたなばたから言われたが、ひどくのどが渇いて瓜を食べてしまった。すると、瓜の中から水があふれ出し川となり、たなばたと若者の間を引き離してしまった。そして、川を挟んで向かい合う二人は、牽牛星と織女星になり、年に一度、七月七日の夜にだけ、たなばたの父の許しを得て会うことができるようになった。

『まんが日本昔ばなし』の話では、竹が天上に伸びることになっているが、日本各地に伝わる昔話では、竹の代わりにヘチマの木であったり、夕顔であったりする話もある。また、わらじの数も一足足りない点では共通するものの、九百九十九でなく九十九である話もある。

さて、日本の七夕伝説では、いくつかの点で中国の伝説と異なる特徴が見られる。主な相違点は

以下のとおり。なお、これらの相違点には、日本における羽衣伝説と重なる部分があるようだが、ここでは七夕伝説の一部として見ていくこととする。

- ・彦星が羽衣を隠してたなばたには渡さず、二人は夫婦になる
- ・彦星が留守の間に鳩が引っ張り出した羽衣をたなばたが見つけて天上界に帰る
- ・彦星はわらじを編んで竹の周りに埋めて伸びた竹を登って天上界に行く
- ・わらじは千足編まなければならなかったが、一足足りなかった
- ・天上界で彦星はたなばたの父から三つの難題を出される
- ・彦星は瓜畑の瓜を食べてしまい、瓜から水があふれて天の川となる

このように、日本の七夕伝説では、水浴びに来た天女の衣を隠して二人が夫婦になることは、羽衣伝説が七夕の話に取り込まれている点で中国の伝説と類似する。しかし、若者（彦星）は牛飼いでないこと、したがって、中国の伝説で重要な存在であった牛は登場しないという大きな違いがある。一方、牛が登場しないために天上界に行く手段としてわらじとその数が重要な意味を持つてくる。また、天上界で彦星が天帝から出される難題や、天の川が瓜からあふれる水によって出現することなどが、日本的な特徴となっていると言える。

さて、この昔話とは別に、幼い頃、七夕の日には織り姫と彦星が年に一度会うこと、彦星が舟を漕いで織り姫のもとにやってくること、七夕の日に雨が降ると二人は会えない、と話に聞かされ、信じてきた人は多いのではないだろうか。昔話と我々の暮らしの中で伝えられてきた七夕の伝承との間にずれがあるのである。とはいえ、万葉集の歌にも詠まれたように、古代から現代まで、彦星が舟で天の川を渡るというのが、日本では一般的であると言っていいだろう。ただし、七夕の日の雨は、万葉集では彦星が舟を漕ぐ糧からこぼれ落ちたものだと考えられていたようだが、いつの間にか七夕の日に雨が降ると二人が会えないことに変わってしまっている<sup>(注5)</sup>。それがいつ頃からか、また、なぜなのかはについては、疑問の残るところである。

#### 4 韓国朝鮮の七夕伝説

朝鮮半島にも七夕伝説は伝わっている。ここでは、『朝鮮の神話と伝説』から、そのおおよその物語を示す。

ある星の国（または天上界）のこと、王にはたいへん美しい姫がおり、王はその姫をとともかわいがっていた。才能に優れていた姫は、特に織物が上手で、自分の仕事として、毎日、機を織っていたので、織女と呼ばれた。父王は、年頃になった織女に、牧童の牽牛を婿として迎えることにした（\*）。

夫婦となった牽牛と織女は、お互いに愛し合い、一時も離れない仲のいい夫婦となった。そして、

織女は機織りを忘れ、牽牛は牛の世話をすることを忘れてしまった。二人が仕事をなおざりにしたので、父王は怒り、二人を呼んで「今後、おまえ達は一年に一度だけ会うことを許す。織女は天の川の東方に行き機を織り、牽牛は天の川の西方に行って牛に草を食ませなさい。ただし、一年に一回、七月七日には相会うことを許す。」と厳しい命令を下した。そして、二人をそれぞれ天の川の東西の遠くに追放した。

やがて一年がたち、牽牛と織女は西と東から天の川に向かって旅を始め、やっとの思いで天の川の東岸と西岸に七月六日にたどり着いた。そして、対岸のお互いの姿を見つけたが、天の川を渡る方法が見つからず、涙を落とした。

さて、下界では七月七日の朝から急に雨が降り始めた。牽牛と織女の涙が、地上で未曾有の大雨となり、降り続く雨で、大洪水になり、田畑も穀物も家も家畜も押し流されてしまった。それで、天上界に通じている日官が占うと、牽牛と織女が天の川のほとりで泣いていることがわかったので、それを地上の王に伝えた。地上の王は、二人を哀れに思い (\*\*)、二人を会わせて地上の天災を食い止めようとした。王は、地上の鵲を集め、牽牛を渡らせるために天の川に橋を架けるように命じた。鵲は、この国に住んでいる恩返しに、いっせいに天上に向かって飛び立ち、天の川に橋を架けた。牽牛は、鵲の橋に驚き、また鵲に感謝しつつ、鵲の頭を踏んで織女のいる向こう岸に渡った。やっと再会できた二人は喜び、地上でも雨がやみ、首尾よくいったことを地上の人々も喜び、二人の幸福を祈った。

そして、天上も地上ももとのように収まり、立派な役目を果たした鵲は大事にされるようになった。また、七月七日には一羽の鵲も見ることができないが、それは、天の川に橋を架けに行くからで、翌日帰ってきた鵲は、牽牛の足に踏まれて頭が白くなっている、とされている。

七月七日の朝の雨は牽牛と織女が天の川のほとりで泣く雨、お昼頃の雨は再会を喜ぶ雨、夜の雨は別離の雨だと言われている。

\* 牽牛は、隣の星の国の王子であるとする話、銀河の対岸に住む牧童であり、織女が一目惚れして父の許しを得て夫婦となるとする話もある。

\* \*地上の王が哀れんで鵲を遣わす、という話でなく、二人を哀れんで鵲が飛んでいく、とする話もある。

鵲の橋については、烏と鵲とが橋をつくるので、その橋の名を「烏鵲橋」という、という話の場合もある。その場合には、七月七日に地上で姿を見ることができなくなるのは、烏と鵲となり、七夕が過ぎて頭が全部禿げて地上に戻って来るのも烏と鵲となる。

また、韓国では、七夕の日の雨については、二人が再会を喜んだり、翌朝になって別れたりする時の涙が地上に降ってくるものであり、雨が降ると二人が会えたと考えられているようである。そして、七夕の日には雨が降るのを待っていた、という話も聞いている<sup>(注6)</sup>。

以上のように、朝鮮半島の七夕伝説は、中国に伝わる七夕伝説と類似点も多いが、異なる点もある。相違点は以下のとおりである。

- ・牽牛も織女も天上界の者である
- ・織女と牽牛とは、織女の父である天上界の王が結婚させる（結婚を許す）
- ・牽牛と織女の二人は夫婦となってから仕事をしなくなったために、父の怒りをかうことになる
- ・父に怒りによって、二人は天の川の東西に離ればなれになる
- ・七月七日に会うことを許されるが、天の川を渡れず、二人は涙を流し、それが地上で洪水となる
- ・地上の鵲が天の川に橋を架け、牽牛がその橋を渡る<sup>(注7)</sup>

韓国朝鮮では、織女は地上界に降りては来ないので、羽衣は問題とならない。牽牛も地上の男ではなく、もともと天上界の者である。この牽牛と織女の関係が、そもそも中国や日本の七夕伝説と大きく異なっており、韓国朝鮮の特徴となっている。そして、伝説の途中までは、天上界と地上界とは結びつかない。しかし、二人の涙が地上に洪水をもたらし、地上界の力で天上での異変に助力すべく、天の川に橋を架けることとなり、ここで、天上界と地上界との関連が出てくるのである。天上界の出来事に地上の出来事や生き物が大きく関わっている点も、韓国朝鮮の特徴である。また、牽牛織女の夫婦はたいへんに睦まじいものの、仕事をなおざりにしたことが天上の王の怒りをかい、罰として離ればなれになることや、牽牛と織女の子や牛が登場しないことなども、韓国朝鮮の七夕伝説の一つの特徴となっていると言える。

## 5 ベトナムの七夕伝説

ベトナムにも、「牛郎と織女」という名称の七夕の昔話がある。ここでは、“Truyện Cổ Tích VIỆT NAM-Bìnhgiải”（ベトナムの昔話 - 解釈）の中より、その話のおおよそをやや詳しく紹介する。

昔、天上界の天女は下界の天女の泉でよく水浴びをした。ある日、働き者の若者が山道に迷って、偶然、山奥の天女の泉に行き着いた。ちょうどその時、三人の天女が水浴びをしているところだった。若者は、天女達の楽しそうな姿を見ていたが、泉のそばに、三着の真っ白な羽衣があるのを見つけ、そっと近づいて一着の羽衣をつかむと、すぐそばの木の陰に隠れた。

やがて水浴びを終えた天女達は岸に上がり、二人の天女は自分の羽衣をまとめて、さっと空高く飛び上がって行った。でも、もう一人の天女は、自分の羽衣を探したが、どこにも見あたらない。

その様子をじっと見ていた若者は、木の陰から出てきて、天女に、何を探しているのか尋ねた。

天女は、この若者が自分の羽衣を盗んだことがわかったので、羽衣を返してくれるよう、強く言った。すると若者は笑いながら、この羽衣は、もう自分のものだから、自分と一緒に家に行き、妻になってくださいと言った。天女は泣きながら、何度も羽衣を返してくれるよう頼んだが、若者は返してくれず、やがて、夕方になった。どうしていいかわからない天女は、若者と一緒に男の家に行くことにした。

家に着くと、若者はまず、こっそり羽衣を隠し、それから、天女の世話をした。そして、天女は人間界でその若者の妻となった。

二人が夫婦になってしばらくして、男の子が生まれた。やがてその子は3歳になり、親を大切にするようになった。

ある日、男は用事でしばらく家を離れることになり、妻（天女）に、「米がなくなったら、黄色の朶かごのほうから出して食べるように。黒い朶かごは、中に蜂がいて刺すから、黒いほうは開けないように。」と言い残した。

ところが、妻は夫の言うとおりにせず、黒い朶かごの米を食べた。しかし、蜂は一匹もいなかった。それで、妻は夫が黒い朶かごに何かを隠していると思い、中を探してみると、天女の羽衣が出てきた。

天女は羽衣を見つけると、親や姉妹に会いたくなって、羽衣を着た。しかし、長い間、羽衣を着ていなかったため、うまく飛べない。それで、幾日も羽衣を着て練習しているうちに飛べるようになったが、息子を置いて天上界に帰ることはなかなかできなかった。

もうすぐ夫が帰って来るというある日の午後、天上界に帰ることを決心した天女は、子どものためにお菓子を作った。そして、お腹がすいたらその菓子を食べるように、また、お父さんが帰ってきたら渡すようにと言い、息子に櫛を預けて、羽衣をまとって天上界に戻って行った。やがて家に戻ってきた男は、妻の姿がなく、息子の着物の中に櫛があるのを見て、事情を悟った。

その日から男は、妻が見つかるかもしれないと思い、子どもを抱いて山に入り、天女の泉を探した。幾日も探して、やっと男は天女の泉を見つけることができた。そして、泉のそばで、息子と一緒に茂みに隠れて、妻がくるのを待った。じっと待っていると、空から年を取った仙女が、水汲みに降りてきた。そこで、男は茂みから出て、その仙女に、形見の櫛を取り出して天女とのことを話し、天女を探してくれるよう頼んだ。男の話聞いた仙女は、その天女は、天上界で機を織る織女（Chúe Nü）で、織女も夫と子どもを恋しがっているだろうから男のことは伝えてやろうと答えた。

次の日の昼過ぎ、男と息子が泉のそばで待っていると、袋と縄を持って二人の天人が天から降りてきた。天人は、男と息子を袋に入れると、天上界の織女の家連れて行ってくれた。そして、夫婦、母子は互いに会えたことを、たいそう喜んだ。

二日が過ぎた。天上界には、下界の者は天上界に来てはならない、という玉皇の命令があったので、愛し合っている夫婦は離ればなれにならなければならなかった。別れの時、織女は男に太鼓と

おにぎりを渡して、縄をつたって下界に降り、地面に着いたら、その太鼓をたたいて知らせるようにと言った。

男と息子は、縄をつたって下界に降りて行った。その途中、お腹がすいた息子に食べさせるために、織女から渡されたおにぎりを出して、太鼓の上に置いた。すると、運悪く、カラスの群れがそのおにぎりを見つけて、つつきに來た。カラスは、おにぎりをつつく時に、太鼓を鳴らしたので、その音を聞いた織女は、夫と息子が地面に着いたと思って、縄を切ってしまった。それで二人は海に落ちてしまった。

それを見たカラスたちは、驚き、恐ろしくなって、天上界に知らせに行った。そして、織女が玉皇の命に背いたことがわかってしまった。

玉皇は、織女が罪を犯したものの、事情を知ると、夫と息子を哀れに思い、二人に天上界で牛(水牛)の世話をする仕事をさせてやることにした。再び天上界に登った男は、牛の世話をすることから牛郎 (Nguu Lang) と呼ばれるようになった。

牛郎は、毎日、牛に草を食べさせるために、銀河の向こう側で暮らし、一方、織女は、銀河のこちら側で、絹布を織った。そして、毎年七月七日だけ、玉皇は二人が会うのを許した。太鼓をたたいてしまったカラスたちは、二人が会う日になると、罪滅ぼしに、頭で石を運んできて、二人が通るための橋を架けた。

それ以来、毎年、七月七日にはよく雨が降るようになった。それは、毎年その日だけ会える、牛郎と織女の夫婦の涙だと言われている。そして、二人が会うための橋を架けるために、頭の上に石を乗せて運んだカラスは、その日には頭が白くなると言われている。

以上が昔話集に収められている七夕伝説であるが、親や祖父母から聞いた話として、異なる七夕伝説もあるようである。その一つを示すと、次のような話である。

昔、天上界で暮らしていた織女 (Chúe Nù) が、天上界のパーティでコップをこぼしてしまった。そのことで罰を受けて、織女は地上界で一年間生活することになった。地上で暮らす間に、織女は貧しい牛飼いの男、牛郎 (Nguu Lang) と出会った。牛郎は貧しかったが、心はとてもよい男で、二人は恋に落ちた。しかし、天上界の玉皇 (Ngoc Hoàng) が二人の恋愛を知ると、怒って織女を天上界に帰らせてしまった。なぜなら、天上界の者と地上界の者との恋愛は禁止されていたからだ。天上界に戻り、牛郎と離ればなれになった織女は、大変に嘆き悲しんだ。その様子は、玉皇の心を動かし、織女を哀れんだ玉皇は、一年に一度、旧暦の七月七日に二人を会わせてくれることになった。そして、七月七日になると、地上と天上を虹が結んで、二人は虹をわたって会うことができた。二人が会えたその時、織女と牛郎は再会を喜んで涙を流すので、地上には雨が降るといふ。<sup>(注8)</sup>

物語としての七夕伝説と、語り継がれてきた七夕の話とは、かなり異なるところがあるのが、ベトナムにおける七夕伝説の特徴のようである。その両方の伝説から、ベトナムの七夕伝説のポイントをまとめると次のようである。

- ・水浴びに下界に降りてきた天女は三人である。あるいは、天上界での罪の償いとして織女は下界にやってくる
- ・牛は登場するが、重要な役割はない。ただし、その牛は水牛である
- ・牛郎と織女には子供ができるが、男の子一人である
- ・天上界から下界に戻る牛郎と息子に織女から渡された太鼓とおにぎりが、話の展開で重要なものとなる
- ・牛郎と織女はカラスが石でつくった橋で再会する。あるいは、天上界と地上界を結ぶ虹の橋で再会する
- ・鶴は出てこず、カラスが重要な役割をもつ
- ・虹の橋で二人が再会する場合、天の川は重要な意味あるものとして出てこない

ベトナムでは、亜熱帯から熱帯という気候風土の影響が、中国・日本・朝鮮半島とはまた違った七夕伝説をつくっている。ベトナムでは、牛と言えば一般に水牛であり、七夕伝説の牛も水牛となっている。そして米所のベトナムでは、羽衣の隠し場所が笊の入った籠であったり、織女が下界に下りる牛郎におにぎりを手渡したりと、米も意味のあるものとして出てくる。また、朝鮮半島から九州辺りには多く見られる鶴であるが、ベトナムにはいないために、二人の再会の場に登場する鳥は鳥となる。さらに、熱帯地域特有のスコールの後に見られる虹が二人を結びつけたりする。これらの点から、七夕伝説の大筋においては中国のものと類似しているが、細かな点や、語り継がれてきた七夕の話においては、ベトナムの特徴を多く強く示すことになる。これは、ベトナムにおいても七夕伝説が人々の暮らしの中に定着し、長い年月が経たことを物語るものと考えられる。

## 6 おわりに (まとめにかえて)

中国から周囲の地域に伝播した七夕伝説は、中国の中においても現代では地域差が見られる。当然、それよりも周囲に位置するそれぞれの地域では、中国の七夕伝説との違いはより大きい。何が伝説の中で重要なものとなっているか、牽牛(牛郎、彦星)と織女(たなばた)はどのように夫婦となり、どのようなことで二人が離ればなれになるか。また、七月七日に二人はいかにして再会するのか。これら重要な点において、中国、日本、韓国朝鮮、そしてベトナムとでは、ある部分では類似点を持ち、ある点ではそれぞれの地域ごとの特徴をなして異なっている。類似点を持ちながらも、いろいろな違いがあるのは、それぞれの地域で七夕伝説が人々に受け入れられて現代にまで伝えられてきた、ということをもっとも物語るものであると言える。また、日本やベトナムのように、

伝説・昔話としてあるものと、七夕にまつわることとして言い伝えられたり、信じられたりしているものとの間には、明らかなずれがある場合もある。つまり、物語としての七夕伝説と、暮らしの中の伝承として存在する七夕の話とがあり、両者は必ずしも同じでないのである。筆者としては、暮らしの中で今も語り継がれている七夕伝説の多様な姿に興味をそそられる。

本稿では、中国・日本・韓国朝鮮・ベトナムに伝わる七夕伝説の代表的なもののおおよそを把握し、主に中国との比較を行いつつ、それぞれの地域での特徴を指摘するに留まった。また、七夕伝説の古典については、史料の豊富な中国と日本についてのみの比較となってしまう。本稿で取り上げなかったタイなどの他地域に伝わる七夕伝説もあるようである。残る課題は多い。そこで、最後になったが、七夕の昔話について、さまざまな情報を提供して下さった本学の留学生をはじめとする中国・韓国・ベトナムの方々に感謝しつつ、今後もさらにアジア各地で語り継がれ、生きている七夕伝説を採集するなどして、より詳細な比較を目指すことを今後の課題としたい。

#### 《注》

注1 中国の七夕の説話は、『文選』よりも古く、晋の周処の『風土記』あるいは後漢の崔寔の『四民月令』に見ることができるという（筆者未見）。また、説話の成立時期について『詩経』の詩に説話の痕跡があるとする説もあるようである。守屋美都雄氏は東洋文庫本『荆楚歳時記』解説の中で、森三樹三郎氏の説（『中国古代神話』、筆者未見）に触れ、森氏が七夕の説話の最も古い史料として『文選』の古詩十九首をあげていること、また「晋代にこれだけ七夕説話が纏まって書かれていることは、それより相当以前に一般で語られていたとしてもよい。従って、七夕説話は後漢に成立したとされる森氏の説に賛意を表したい。」と述べている。いずれにせよ、中国の七夕伝説は今から二千年ほど昔にまで遡れるわけであり、確かな史料として『文選』の古詩十九首は最も古いものの一つと言える。

注2 『荆楚歳時記』の原著者は宗懔。宗懔は南陽涅陽（河南省鄧県）の人で、紀元500年前後に生まれ、560年前後に64歳で没した。『荆楚歳時記』は荆楚地方の風物の記録であり、初めは「荆楚記」という名称であったものが、隋の杜公瞻の注釈本成立の時に『荆楚歳時記』となったであろう、と守屋美都雄氏は『中国古歳時記の研究』、ならびに東洋文庫本『荆楚歳時記』解説の中で述べている。また、守屋氏は宗懔の荆楚記は奈良時代初期初め頃までには日本に伝来していたとも述べている。

注3 桜井満（1993）による。『万葉集事典』（別冊國文學）によれば、秋の季節を歌った七夕の歌は121首とある。

注4 例えば、百人一首にも採られている『新古今和歌集』所収の家持の歌「かさゝぎのわたせる橋にをく霜の白きを見れば夜ぞふけにける」の第一句（620番歌）。

注5 日本各地の七夕の日にまつわる言い伝えの中には、七夕の日に雨が降らないと疱瘡神がたた

るが、雨が降ると疱瘡神と疫の神が天の川で会うので心配ない（山梨）、七夕の日に三粒でも雨が降るとその年は雨が多い（埼玉）、七夕の日の雨は虫になって作物にたかる（長野）、など、雨に関わるさまざまなものも少なくない。

注6 韓国出身者に七夕の日の雨について聞くと、七夕の日に雨が降ると二人が会える、七夕の日の雨を子供の頃は待っていた、という答えが返ってくる。また、『朝鮮歳時記』（随筆）の「七月七日」の項には、次のようにある。

朝鮮でも、この日は雨の日とされていた。

（中略）

日本では、どうなっているか知らないが、朝鮮では、国中の鶺鴒<sup>かさぎ</sup>が一箇所にあつまって、銀河を渡って牽牛と織女とが会うための橋をつくってやる。

この橋のことを、<sup>オチヤクギヨ</sup>烏鶺鴒橋という。

旧暦の七夕をすぎると、<sup>かさぎばし</sup>烏鶺鴒橋作りに動員された鶺鴒は、みな頭の天辺が白く禿げてしまう。

（中略）

日本では、色紙を短冊形に切って、それにうたを書いて、笹竹に結びつけ、瓜や茄子を供えるようであるが、朝鮮では、雨にぬれながら縁側に坐って、天の河をはさんでくりひろげられているに違いない牽牛と織女の物語を、面白おかしく語ってやるだけである。

筆者も、子どものとき、祖母の膝にいだかれて、七夕のはなしを何度も聞いたものだ。

注7 『朝鮮の神話と伝説』では、鶺鴒の橋を渡るのは牽牛だけとなっているが、代々親（祖母）から子（孫）へと語られた話として韓国出身者から筆者が採集したいくつかの七夕の話では、この点は明確ではない。

注8 ハノイ在住のPham Thi Thu Haさんが、子供の頃、おじいさんおばあさんから聞いた話だという。また、別のハノイ在住の人の話では、地上に遊びに来ていた織女が牛郎と出会って恋に落ち、離ればなれになった二人は虹の橋で再会できる、という話もある。なお、二人が再会するのは虹の橋でなく鶺鴒のつくった橋だと聞かされた、というベトナム人もいる。

#### 《引用文献》

『詩経（中）』（新釈漢文体系第111巻、明治書院、1998）

『文選（詩騷編）四』（全釈漢文体系第二十九巻、集英社、1994）

『玉台新詠（上・下）』（新釈漢文体系第60・61巻、明治書院、1974～75）

『荊楚歳時記』（東洋文庫324、宗懐著・守屋美都雄訳注、平凡社、1978）

『燕京歳時記』（東洋文庫本83、小野勝年訳、平凡社、1967）

『万葉集二』（新日本古典文学体系2、岩波書店、2000）

『古今和歌集』（新日本古典文学大系5、岩波書店、1989）

- 『新古今和歌集』(新日本古典文学大系11、岩波書店、1992)  
 『和漢朗詠集 梁塵秘抄』(日本古典文学大系73、岩波書店、1965)  
 『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(日本古典文学大系69、岩波書店、1964)

《参考文献》

- 守屋美都雄 (1963) 『中国古歳時記の研究』帝国書院  
 宗懐著・守屋美都雄訳注 (1978) 『荆楚歳時記』(東洋文庫324) 平凡社  
 中村喬 (1988) 『中国の年中行事』(平凡社選書115) 平凡社  
 桜井満 (1993) 『節句の古典』雄山閣出版  
 稲岡耕二編 (1993) 『万葉集事典』(別冊國文學No.46) 學燈社  
 川内彩友美編 (1997) 『決定版まんが日本昔ばなし』講談社  
 網野喜彦・大西廣・佐竹昭広編 (1989) 『瓜と龍蛇』(いまは昔むかしは今 第一巻) 福音館書店  
 申 来鉉 (1971) 『朝鮮の神話と伝説』太平出版社  
 許 南麒 (1981) 『朝鮮歳時記』同成社  
 PHÒNG VĂN HỌC CỔ-CẬN ĐẠI VIỆT NAM (2001) “Truyện Cổ Tích VIỆT NAM-Bìnhgiải” NHÀ XUẤT BẢN VĂN HỌC (ベトナム近代文学室編 (2001) 『ベトナムの昔話 - 解釈』文学出版)